

〈新刊紹介〉

加藤重広・滝浦真人編

『語用論研究法ガイドブック』

本書は、語用論の研究方法を具体的に示すことを目的として編まれた、初学者・研究者のための総合的な研究書である。

本書の構成は次の通りである。「第1章 総説」では学史的背景や基本概念と枠組みを論じる。続く各論には、9つの分野に関する論考がまとめられる。「第2章 指示と照応の語用論（澤田淳）」、「第3章 社会語用論（滝浦真人）」、「第4章 歴史語用論（椎名美智）」、「第5章 対照語用論（堀江薫）」、「第6章 統語語用論（加藤重広）」、「第7章 関連性理論・実験語用論（松井智子）」、「第8章 応用語用論（清水崇文）」、「第9章 会話分析と談話分析（熊谷智子）」、「第10章 語用論調査法（木山幸子）」。末尾に、「あとがき」「索引」「執筆者紹介」を付す。

(2016年11月28日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 308頁 2,800円+税 ISBN 978-4-89476-835-2)

原田伊佐男著

『埼玉県東南部方言の記述的研究』

本書は、埼玉県東南部の方言の言語体系を記述するものである。著者が1972年に早稲田大学に提出した修士論文『埼玉県東南部方言の記述的研究』をもとにその後の研究成果が加えられた1996年の補注版（私家版）『埼玉県東南部方言の記述的研究』の改訂版として刊行された。

本書の構成は次の通りである。「埼玉県東南部方言の特徴と本書の概要」と、「まえがき」に続き、「第1章 音韻」、「第2章 アクセント」、「第3章 文法」、「第4章 構文法」。末尾に、「あとがき」「原田伊佐男の学問（久島茂）」「索引」が付く。

また、付録のCD-ROMには、「埼玉県東南部方言語彙集」、「琉球語の活用の成立に関する考察——「居り」・「有り」の「終止形」をどうみるか——」が収められる。

なお、本書は、平成26年一般財団法人新村出記念財団の刊行助成を受けたものである。(2016年11月30日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 460頁 6,400円+税 ISBN 978-4-87424-712-9)

高木智世・細田由利・森田笑著

『会話分析の基礎』

本書は、言語学・言語教育学における会話分析を専門とする研究者を念頭においてまとめられた日本語の会話分析のためのテキストである。専門的概念の解説に留まらず、

各章の章末に「課題」が付され、会話分析的にデータを扱うことの意味を実践的に考えることができるしくみになっている点が特徴的である。

本書の内容は以下の通りである。「第1章 「会話」の研究」には、「1. 日常会話の重要性」、「2. 会話分析の起源」、「3. 会話分析の誕生」、「4. 会話参加者の視点」、「5. 会話分析における「発話」の概念」。「第2章 会話分析の視点と研究プロセス」には、「1. 会話分析の視点」、「2. 会話分析研究のプロセス」、「3. おわりに」。「第3章 順番交替の組織」には、「1. 順番交替システムという社会秩序」、「2. 会話の諸特徴」、「3. Sacks, Schegloff and Jefferson (1974) のモデル」、「4. 発話の重なり・間合い・あいづち」、「5. 日本語会話の分析における問題点」、「6. おわりに」。「第4章 連鎖の組織と優先組織」には、「1. 連鎖の組織」、「2. 優先組織」、「3. おわりに」。「第5章 修復の組織」には、「1. 会話分析における修復連鎖」、「2. 修復のタイプ」、「3. 修復開始の位置」、「4. 修復開始の技法」、「5. 自己修復の優先性」、「6. 日本語特有の修復」、「7. まとめ」。「第6章 物語を語ること」には、「1. 物語りの始まりと終わり」、「2. 物語りの展開」、「3. 物語りと非言語要素」、「4. まとめ」。「第7章 受け手に合わせたデザインと成員カテゴリー」には、「1. 受け手に合わせたデザイン——場所と人への言及——」、「2. 成員カテゴリー」、「3. まとめ」。「第8章 相互行為と文法」には、「1. 会話の「文法」とは何か」、「2. 発話産出の実践」、「3. 行為連鎖の位置により異なる役割を果たす文法」、「4. 実践としての文法」、「5. 会話分析的アプローチによる言語研究の姿勢」、「6. まとめ」。「第9章 教室内相互行為——制度的場面の分析——」には、「1. 制度的場面の相互行為」、「2. 教室における相互行為」、「3. まとめ」。末尾に、「参考文献」「付録 データ収集に際しての承諾書サンプル」「索引」「著者紹介」を付す。

(2016年12月7日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 376頁 3,500円+税 ISBN 978-4-89476-826-0)

青木博史・小柳智一・高山善行編

『日本語文法史研究 3』

本書は、日本語を対象とした文法史研究に関する継続的な研究成果の発信を目指して刊行された論文集『日本語文法史研究』の第3号であり、日本語史研究の研究論文に加え、テーマ解説および書評を収める点が特徴的である。

本書の構成は次の通りである。「はしがき」に続き、「名詞の語形変換——接尾辞における母音交替——(小柳智一)」、「中古語ニヤアラムの淵源(近藤要司)」、「ケム型疑問文の特質——間接疑問文の史的研究のために——(高山善行)」、「「べし」の否定形式の主観的用法——否定推量」の発生と定着——(藤井俊博)」、「「聞き手領域」に関わるア系列の指示——中世を中心に——(藤本真理子)」、「逆接確定条件表現形式の推移についての一考察——中世後期から近世にかけて——(宮内佐夜香)」、「上方語における分裂文の歴史的变化(坂井美日)」、「ダケノ句の史的展開——副助詞句の名詞性——(宮地朝子)」、「現代日本語における左方転位構文のタ

イブと起源（竹内史郎）, 「[-おく] の歴史的変遷——韓国語 [-twuta] との対照を視野に入れて——（一色舞子）」の各論文, さらに, 「【テーマ解説】文化化（ナロック・ハイコ）」, 「【テーマ解説】コーパス（小木曾智信）」, 「【文法史の名著】関一雄著『国語複合動詞の研究』（青木博史）」, 「日本語文法史研究文献目録 2014-2015」を収める。末尾に「索引」「執筆者紹介」が付く。

（2016年12月9日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 310頁 3,200円+税 ISBN 978-4-89476-833-8）

角岡賢一編, 角岡賢一・飯村龍一・五十嵐海理・福田一雄・加藤澄著

『機能文法による日本語モダリティ研究』

本書は、いわゆる機能文法の枠組みを用いて日本語におけるモダリティの分析を試みたものである。複数の著者によってそれぞれの章が執筆されているが、ハリデーによる機能文法を軸とした一貫性があること、日本語研究における陳述論やモダリティ論への詳細な言及・検討も含まれている点が特徴的である。

本書の構成は次の通りである。「はしがき（角岡賢一）」に続き, 「第1章 機能文法によるモダリティ分析にむけて（飯村龍一）」, 「第2章 陳述論の系譜とモダリティ（五十嵐海理）」, 「第3章 機能文法での叙法体系・モダリティの定義（福田一雄）」, 「第4章 機能文法による記述体系（角岡賢一）」, 「第5章 モダライゼーションとモデュレイションの下位分類（角岡賢一）」, 「第6章 テキスト分析の中で対人的言語資源を考える（加藤澄）」, 「第7章 結び（角岡賢一）」を収める。末尾に「参考文献」「索引」, さらに日本語の各形式との対応も明記された「日本語叙法構造の選択体系網」と題した図表が付く。

なお、本書は龍谷大学国際社会文化研究所 2012・2013 年度共同研究の成果であり、同研究所叢書として刊行された。

（2016年12月11日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 326頁 4,500円+税 ISBN 978-4-87424-714-3）

大西拓一郎編

『新日本言語地図——分布図で見渡す方言の世界——』

本書は、2010年から2015年にかけて全国554地点で実施された、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」（FPJD, 研究代表者：大西拓一郎）の結果を分布図にし、解説を付したものである。FPJDにおける211の調査項目のうち、149項目の分布図が全150図に収められている。地図化の方針と解説文は各項目の執筆者の観点に委ねられるが、ウェブサイトにおけるデータの公開によって客観性を確保している。各項目の解説には、調査の「質問文・質問番号・絵」のほか、『日本言語地図』（LAJ）・『方言文法全国地図』（GAJ）に対応する場合に示す「参考地図」のほか、ねらいや分布概要、見出しデータのまとめ方などが示される。

本書の構成としては、全体を「語彙」「音韻」「文法」に大分類し、さらに小分類される。「まえがき」には本書の説明に加え、データ公開・調査者・執筆担当者などの情報が含まれる。続く「語彙項目」には、「動植物」、「食物・身体」、「道具・家屋」、「親族」、「動作」、「味覚・感情」、「日時」、「民俗」に分類される63図。「音韻項目」には、「鏡」を含める5図。「文法項目」には、「否定」、「過去・現在」、「命令・禁止・義務」、「形容詞」、「形式名詞・準体助詞」、「格助詞」、「条件」、「アスペクト・テンス」、「存在・断定」、「伝聞・推量・意思・勧誘・希望」、「授受」、「待遇」、「挨拶」に分類される81図。末尾に、「地図名索引」を付す。

(2016年12月15日発行 朝倉書店刊 B5判横組み 320頁 6,000円+税 ISBN 978-4-254-51051-5)

野呂健一著

『現代日本語の反復構文——構文文法と類像性の観点から——』

本書は、現代日本語の研究においてこれまで焦点が当てられることがそれほど多くなかった様々な反復を表す表現を対象に、詳細な記述と構文文法の枠組みを用いた体系的な分析を試みており、2010年に名古屋大学国際言語文化研究科に提出された同名の博士学位取得論文に加筆修正を行ったものである。

本書の構成は次の通りである。「まえがき(初山洋介)」「本書における表記法」に続き、「第1章 序論」、「第2章 理論的背景」、「第3章 名詞反復構文の考察」、「第4章 動詞反復構文の考察」、「第5章 形容詞反復構文の考察」、「第6章 述語反復構文の考察」、「第7章 まとめと今後の展望」を収める。末尾に、「あとがき」「参考文献」「例文出典」「索引」が付く。

(2016年12月23日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 293頁 3,800円+税 ISBN 978-4-87424-721-1)

永田良太著

『接続助詞ケドの発話解釈過程と談話展開機能』

本書は、2002年に著者が広島大学に提出した学位論文「談話に基づく接続助詞ケドの機能に関する研究」にその後の研究成果が加筆され、まとめられたものである。

本書の構成は次の通りである。「序章」に続く「第1章 接続助詞ケドに関する先行研究」には、接続助詞ケドの用法、バリエーション、先行研究、課題がまとめられる。「第2章 接続助詞ケドの用法間の関係」では、実際の発話場面をもとに従来の研究では明らかにされなかった接続助詞ケドの用法間の関係を示す。また、「第3章 談話のトピック展開と接続助詞ケドの関わり」では、自由談話(話し言葉)と社説(書き言葉)を対象に接続助詞ケドの出現状況を捉えながら接続助詞ケドの解釈過程と談話のトピック展開への関わり方を明らかにする。「第4章 聞き手の言語的反応と接続助詞ケドの関わり」では、接続助詞ケドが談話中に用いられる場合の各用法と聞き手の言語的反応との関わり

りを論じる。末尾に、「終章」「用例出典」「参考文献」「謝辞」「索引」が付く。

なお、本書は JSPS 平成 28 年度科学研究費助成事業研究成果公開促進費、科学研究費補助金の助成を受けて刊行された。

(2017 年 1 月 26 日発行 溪水社刊 A5 判横組み 192 頁 3,800 円+税 ISBN 978-4-86327-376-4)

崎山理著

『日本語「形成」論——日本語史における系統と混合——』

本書は、複数の言語要素の存在を前提とする形成論の立場から、日本語が混合語に至った過程を検証する書である。日本列島における言語接触の事例を概観し、日本語の系統と形成の問題を整理したうえで語の意味変化について著者の論考がまとめられる。もともなった過去の原論文については「あとがき」に示される。

本書の構成は次の通りである。「第 I 部 従来の日本語系討論」には、「第 1 章 日本語の形成過程と言語接触」。「第 II 部 日本語形成論への展望」には、「第 2 章 ツングース諸語の言語要素」,「第 3 章 世界における混合語」。「第 III 部 古代日本語におけるオーストロネシア語系語彙・文法要素」には、「第 4 章 日本語の混合語的特徴」,「第 5 章 民俗語彙例——音変化と意味変化——」,「第 6 章 接辞の起源」,「第 7 章 人称代名詞の体系」,「第 8 章 語彙からみた稲作の歴史」,「第 9 章 地名に読む渡来の時期」,「第 10 章 日本語とオーストロネシア諸語の「特異な対応」」。末尾に、「引用・参考文献」「上代日本語・現代日本語方言 語彙索引」「事項名索引」「人名索引」「あとがき」を付す。
(2017 年 2 月 1 日発行 三省堂刊 A5 判横組み 304 頁 4,300 円+税 ISBN 978-4-385-35315-9)

山崎誠著

『テキストにおける語彙的結束性の計量的研究』

本書は、テキスト研究において重要なテーマである結束性について、先行研究の多くを占めてきた指示や代用等による文法的結束性ではなく、コロケーションといった語彙的結束性に焦点を当て、コーパスを用いた計量的な研究を提示しており、2014 年度に東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科へ提出された学位申請論文を元にしたものである。

本書の構成は次の通りである。「第 1 章 テキストにおける語彙的結束性」,「第 2 章 テキスト全体の計量的特性と語彙的結束性との関係」,「第 3 章 テキスト中の語の分布と語彙的結束性」,「第 4 章 テキストの構造と語彙的結束性」,「第 5 章 まとめと課題」の各章を収め、末尾に、「参考文献」「初出一覧」「謝辞」「索引」が付く。また、目次には図表目次が別途示されている。

なお、本書は JSPS 平成 28 年度科学研究費助成事業研究成果公開促進費（課題番号 16HP5072）による助成を受けて刊行された。

宮部真由美著

『現代日本語の条件を表わす複文の研究——ト条件節とタラ条件節を中心に——』

本書は、現代日本語において条件を表す複文、特にトとタラによって導かれる従属節を対象にした記述的な文法研究であり、実際の用例を多く用い、計量的な手法を取り入れている点が特徴的である。2015年に一橋大学より博士の学位を受けた同名の学位論文を元に加筆修正を行ったものである。

本書の構成は次の通りである。「刊行にあたって（庵功雄）」「序論」の後、「本論」においては「第1章 分析の観点と概要」に続き、「第I部」に「第2章 従属節に「仮定条件」をさしだすシナイト節を従属節とする従属複文」,「第3章 ト条件節を従属節とする従属複文がすでにあることがらを表わす場合」,「第4章 ト条件節を従属節とする従属複文がまだ起こっていないことがらを表わす場合」,「第I部のまとめ」,「第II部」に「第5章 タラ条件節を従属節とする従属複文がすでにあることがらを表わす場合」,「第6章 タラ条件節を従属節とする従属複文がまだ起こっていないことがらを表わす場合」,「第II部のまとめ」,「第III部」に「第7章 手順テキストにあらわれる時間関係と条件関係の接続形式」,「第8章 スルト節, シタラ節, シテ節と継起性」を収め、「結論」へ続く。末尾に、「あとがき」「用例採集資料」「参考文献一覧」「索引」を付す。

なお、本書はJSPS平成28年度科学研究費助成事業研究成果公開促進費（課題番号16HP5061）による助成を受けて刊行された。